

立命館大学アート・リサーチセンター
 文部科学省 共同利用・共同研究拠点「日本文化資源デジタル・アーカイブ研究拠点」
 2019 年度 共同研究成果報告書〔研究設備・資源活用型〕

2020 年 5 月 20 日 提出

1. 研究課題名	
黎明期広告業界誌『プレスアート』広告現物の研究 (英文表記: Study on advertising materials that early advertisement trade journal " Press Art " distributed)	
2. 研究代表者	
氏名(ふりがな)	所属機関・職名
竹内幸絵(たけうちゆきえ)	同志社大学 社会学部 教授
3. 研究分担者 (合計: 2 名)	
氏名(ふりがな)	所属機関・職名
佐藤守弘(さとう もりひろ)	京都精華大学 デザイン学部 教授
熊倉一紗(くまくら かずさ)	京都造形芸術大学 美術学部 非常勤講師

4. 研究課題の概要(300 字程度) (申請書から変更がある場合は、変更点が分かるように明記してください)
<p>本研究は昭和 12(1937)年に広告現物の頒布を目的に京都で創刊された広告業界誌『プレスアート』の調査とデータベース化によって、広告表現を時代意識の有力な証言者と位置付けた探究に資することを旨とするものである。同誌は戦時 5 年の停止期をはさみ昭和 61(1986)年まで、およそ 45 年間月刊で発刊された。発行部数が極めて少なく幻の存在だったが、334 号分、およそ 6 千点に及ぶ広告現物のほぼ全てが発行人遺族宅にて発見された。同時期の広告現物資料としては比肩する類例がないこれらを、本研究で調査しデジタルデータベース化する。付属冊子に記載の発行年、印刷種別、制作経緯等とあわせみる事が可能な形式を構築し、社会学・デザイン史・写真史・メディア史といった多方向からの学際的なアプローチが可能な広告史探究資料となることを目指す。</p>
5. 研究成果の概要 (この項は、本センターのホームページ・紀要等で公開することがあります)
<p>今年度は前年度までに ARC サーバーへの移行を終えた2つのデータベースを 10 名の研究者に公開し、これを使った研究会を開催した。一部の作品(およそ 350 点)の精細写真を撮影した。学術雑誌に当該資料についての論考を掲載した。10 名の研究者の共著とし研究書籍を出版した。詳細は以下の通り。</p> <p>1、「プレスアート」データベース利用共同研究会参加者 松實 輝彦(名古屋芸術大学)/佐藤 守弘(京都精華大学)/熊倉 一紗(京都造形芸術大学)/植木 啓子(大阪中之島美術館)/村瀬 敬子(佛教大学)/石田 あゆ(桃山学院大学)/輪島 裕介(大阪大学)/北廣 麻貴(同志社大学社会学部メディア学科)/寺本 美奈子(凸版印刷印刷博物館)</p> <p>2、学術雑誌掲載論考詳細 「プレスアート研究会の事業—広告現物を頒布した小規模メディアが残したもの」(研究ノート)、竹内幸絵、『メディア史研究』第 46 号、メディア史研究会、pp.108-131</p> <p>3、研究書籍詳細 『開封・戦後日本の印刷広告『プレスアート』同梱広告傑作選(1949-1977)』(創元社)、竹内幸絵編著 1、に記載の研究領域の異なる 10 名の研究者それぞれの論考と、6000 余点から選出した広告作品計 340 点のカラー精細写真を竹内が編集し出版した。全 235 頁、ハードカバーB5 版。</p>

6. 研究業績

(1) 著書

- ・『開封・戦後日本の印刷広告『プレスアルト』同梱広告傑作選〈1949-1977〉』(創元社)、2020年3月、竹内幸絵編著、共同執筆者は5.に記載の通り。
竹内担当執筆箇所「第1章『プレスアルト』というタイムカプセル」(pp.6-17)、「第7章 百貨店広告 百貨店という文化装置の戦後——広告から見えるもの」(pp.92-123)

(2) 論文

- ・「プレスアルト研究会の事業—広告現物を頒布した小規模メディアが残したもの」(研究ノート)、竹内幸絵(単著)、2019年9月、『メディア史研究』第46号、メディア史研究会、pp.108-131、査読あり

(4) 主催したシンポジウム・研究会等

- ・「プレスアルト」データベース利用共同研究会 参加者を研究者に限定した研究会を6月から9月に4回開催。

(5) その他研究活動(報道発表や講演会等)

- ・朝日新聞 2020年4月25日文化欄に(1)の書籍が掲載された。

(7) 科学研究費助成事業

- ・(継続) 科研基盤C「黎明期広告業界誌『プレスアルト』広告現物全調査に基づく関西の広告史研究」2016-2020